近所に住む外国から働きに来ている方々

私の住んでいる高瀬町にも、外国から日本に仕事に来ている方がけっこういらっしゃいます。私の家の斜め向かいは、中国から来ている若い女性が何人も住んでいます。また、真向かいの３階建てのアパートには、東南アジアから来ている若い男性の方々が多く住んでいます。高瀬町も国際的になったものです。

数年前、私と母が庭仕事をしていますと、若い中国人の女性が、「花、見ていい？」と話しかけてきました。その姿や言葉から、中国から日本に来たばかりの方だと、すぐに分かりました。
「好きなだけ見ていってな。いつでも見にきたらええよ。」
と、母が答えましたが、彼女に通じたのか通じなかったのかは分かりませんでした。彼女は、しばらく、うちの庭の花や木を「懐（なつ）かしそうに」見ていました。その表情は、とてもさびしそうに見えました。
「あの娘さん。きっと、うちの花や木を見て、中国の家や家族のことを思い出したんやな。」
と、母がつぶやくように話しました。
それから、数か月後、私の家の前で、たまたま彼女を見かけました。服装も髪の毛の色も、そして表情もすっかり明るくなって、仲間たちと楽しそうにおしゃべりをしながら歩いていました。その姿を見て、もう彼女には、うちの庭の花や木は必要ないのだと実感しました。

一方、これも数年前のことですが、真向かいに住んでいる外国人の若者たちは、夜になるとアパートの駐車場でバーベキューみたいなことを始め、けっこう大声で遅くまで話をしていました。お酒もたくさん飲んでいるようで、ゴミ置き場の空き缶入れには、同じ種類のアルコール類の缶が積み上がって、風でカラカラと道に転がっていることもありました。注意しようかと思ったのですが、直接注意して、逆恨みされたら嫌だなと思い、管理人の方に言って注意してもらおうかと思っていた時のことです。駅に向かおうと家を自転車で出た所で、当時高校生だった娘は、転倒し、けがをしてしまいました。朝の通学・通勤時間帯でしたので、けっこうな人通りはあったそうですが、すぐに駆けつけて助けてくださったのは、真向かいの若者たちだけだったそうです。こわれた自転車まで、彼らは直してくれたそうです。「あの人たち、いい人やで。」と言う娘の言葉で、苦情を言うのはやめました。不思議なことに、それからしばらくすると、夜のバーベキューはなくなりました。大きな声も、ほとんど聞こえなくなりました。誰かが注意したのか、自粛したのかは分かりませんが・・・。本当に、それ以来、住人が次々に変わっても大きな声はしなくなりました。

あれから何年も経った今日の朝（敬老の日）。家の車庫の前で動かなくなってしまった車（50年以上も前の車：実は、私は旧車オーナーです。）を手で押していたのですが、一人の力では、ゆるやかな坂になっている駐車場の中に入れられなくて困っていました。それを見た前のアパートに住んでいる若者（最近、ここに住み始めた外国人の若者）が、走ってきて、身振り手振りで何かを伝えようとしています。間違いなく「車を押すのを手伝いますよ。」と伝えているのです。私が「お願いします。」と頭を下げると、何人もの人が集まって、軽々と車を車庫に入れてくれたのです。その中の一人に、私は見覚えがありました。数日前、私が帰宅した時に、私に向かって話しかけてきた若者でした。うちの庭の道路の脇にある「すだち」のなっている木を指さして「これ、少しいいですか？」と話しかけてきた若者でした。「どうぞ。」と言うと、彼は、遠慮がちに何個かの実をもぎ取って、丁寧におじきをしてアパートに帰って行ったのです。

こんなことがあって、数年前のすっかり忘れていた出来事を思い出してしまいました。そして、何だか、とてもはずかしい気持ちになってしまいました。

近所の電気屋さんの店じまい

　これは、今から１０年ほど前、アナログ放送対応のテレビ（小学生の皆さんはデジタルテレビしか知らないか･･･。申し訳ありませんが、お子様に「アナログテレビって何？」と聞かれたら、分厚いテレビのことを教えてあげてください。）がまだあった頃、友人から聞いたお話です。

　２０１１年には、アナログテレビは、今のままでは観ることができなくなります。チューナー（アナログテレビのままデジタル放送を見ることができるための機械）を買って何とか見るよりも、思い切ってデジタル放送対応の薄型テレビに買い換えた方がいいかなあと友人と話していた時のことです。ふいに、その友人が、近所の小さな電気屋さんが閉店した話を始めました。

友：「最近、うちの近所に立て続けに大手の家電販売店ができたんだよ。開店の前に、店長と名乗る人が、粗品を持ってあいさつに来たんだ。」
私：「便利になっていいじゃないか。」
友：「まあ、そうなんだけどね。〇〇電気です。来週オープンいたします。ご近所の皆様には、お騒がせしてご迷惑をおかけしますが、ぜひ、ご来店ください、と丁寧に『ご近所様割引券』まで置いていったよ。俺も、店をのぞきに行ったけど、品物は多いし、値段も安いなあと思ったよ。」
私：「何か、買ったのか？」
友：「乾電池でも割引券を使って買おうかと思ったけど、ちょっと気になることがあってやめたんだ。」
私：「どうしたんだ。」
友：「実は、うちの３軒隣は電気屋さんなんだよ。昔は、他に電気屋さんもなかったし、近所だということで何かと安くしてもらったけど、最近は、すっかりご無沙汰しているよ。品数も値段も、大きな電気屋さんとは違うしね。せめて、乾電池や電球くらいは、と思うんだけど、こうなるとかえって行きづらいもんだよ。結局、乾電池は買わなかったんだ。」
私：「分かるわ、その気持ち。それで、近所のお店でも新しくできたお店でも買ってないんだね。」
友：「そうなんだ。ちょうどその頃、その近所の電気屋さんの親父さんが突然うちに来て、『今日は、閉店のごあいさつにうかがいました。うちの父があの店を始めてから６０年以上、私も、もう８０歳になりました。店をたたんでゆっくりしろと息子たちがうるさいものでね。これまで長い間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。』と深々と頭を下げるんだよ。それで、『売れ残りの余った物で申し訳ないのですが、乾電池です。よかったら使ってやってください。』と、何と単三電池を４本、差し出すんだよ。俺、はっとして、申し訳なくて、それは、いただけませんと何回も断ったんだけど、その親父さん、無理矢理、乾電池を置いていったんだ。」
私：「不思議なこともあるもんだなあ、偶然とは思えないなあ。」
友：「そうだろ！俺は、あの親父さんの後ろ姿が見えなくなるまで頭を上げることができなかったよ。あの親父さん、うちだけじゃなく、ご近所全部を回って、乾電池やら電球やらを置いていってるらしいよ。新しくできた大手の家電販売店さんは、この前、開店のあいさつには来たけど、閉店する時にも、あいさつに来るんだろうか。どう思う？」
私：「どうかなあ？」

　友人の話はこれだけでしたが、私はこのことが心から離れませんでした。私の家の近所の電気屋さんのことも、ふと思い出してしまいました。そして、デジタルテレビを購入するのは、少し先に延ばしてしまいました。

ガラスは割れるからいいんだ！

今朝、ガラス屋さんが体育館の入り口のガラスの修理に来てくださいました。内側からですので、何か堅い物が当たったのでしょうか。割れてはいないのですが、ひびが入っています。最近のガラスは、本当に強くなりました。野球のボールが当たったくらいでは割れない強化ガラスが多くなってきました。ですから、学校にガラス屋さんが来られることも、めったにありません。

私が小学生の頃のガラスは、本当に割れやすかったのです。あまり勢いのない野球のボールでも、ガラスに当たるとパリーン、ガシャーンと、とても嫌な音を立ててガラスの破片が飛び散っていきました。時には、ガラス窓にもたれかかっただけでもパリーン、ガシャーン、ほうきの柄が少しコツンと当たっただけでもパリーン、ガシャーン。私は、子どもの頃は（今もかもしれませんが）「落ち着きのない子」でしたので、ガラスをたくさん割りました。１年生の時に、１日に２枚も割ったことがあります。その時は、さすがにこっぴどく叱られました。確か、１週間くらいトイレに行く時以外は席から離れてはいけないような罰を受けたと思います。６年間、１枚もガラスを割ったことがないというクラスメートもたくさんいるのに、なぜか私は、人の何倍もガラスを割ってしまうのです。それは、学校だけに限ったことではありません。家のガラスも何枚も割ってしまいました。例えば、家でブロック塀にボールを投げていて、少しそれてガラス窓に当たってしまいパリーン、ガシャーン。自転車を出そうとして、入り口近くのガラス窓にペダルが当たってしまいパリーン、ガシャーン。もっともひどいのが、机の上から飛び降りた瞬間にその振動で、ガラスの扉が外れて倒れてパリーン、ガシャーン。今、思い出しましたが、ガラスだけでなく食器もたくさん割りました。

あの嫌な音を何回、何十回聞いたことか・・・。その度、私は、たくさんの大人からひどく叱られるのです。そして、してはいけないことがどんどん増えていってしまったのです。

一人しょげていると近所に住んでいる祖母が話しかけてきました。

「また、ガラスを割ってしもたんか。けがをせんかったからよかったの。」

と言う祖母に、私は、

「ガラスが鉄でできとったら、こんな思いをせんでもええのに。ガラスが割れるからいかんのや！」

と、文句を言いました。すると祖母は、

「いや、ガラスは、割れるからいいんじゃ。そのうちお前にも分かる。よく覚えとけ。ガラスは、嫌な音を立てて割れるからいいんじゃ。」

「分からん！分からん！分からん！」

と泣き叫ぶ私に、祖母は続けて言いました。

「今は分からんでも、いつか分かる。ガラスは、嫌な音を立てて割れるからいいんじゃ。世の中には、音を立てんと壊れていくものもある。嫌な音は、お前に何かを気付かせてくれとるんや。」

私は、これ以上話しても無駄だと思い、その後は反論する（抵抗する）のをやめました。

あれから５０年。ガラスは、鉄でもないのに強くなりめったなことでは割れない、５０年前の私からすると理想の世の中となったわけです。そして、あの時に分からなかった祖母の言葉の意味を私はようやく理解することができました。ガラスは、割れたのではなく確かに私が割ったのです。もしも、ガラスが鉄でできていたとしたら、どんなに乱暴に扱っても割れることはありません。ガラスが割れた原因は、どう考えても自分の不注意です。想像力もなかったのでしょう。「もし、ここで、こうすれば、こうなるかもしれない。」と考えるだけの・・・。ガラスは、嫌な音を立てて、それを私に教えてくれていたのではないでしょうか。

ところで、あの時祖母が言った「音を立てずに壊れていくもの」って何でしょうか？このことについては、これから詫間小学校の子どもたちと一緒に考えてみたいと思います。

家に救急車を呼んだ話

私が高校３年生の時ですから、もう４０年も前のことになります。救急車を家に呼んだことがあるのです。

先日、３年生の社会科の授業を観ていると、「消防署や警察署のお仕事」について勉強していました。１１０番通報（警察）や１１９番通報（消防）があれば、その後、どうなるのかということについて調べていたのです。その授業を観ていて、４０年も前のことを思い出したのです。

当時、私は高校３年生で、家で受験勉強をしていました。ちょうど冬休みで、４歳年上の姉（当時大学４年生）が帰省しており、家には、私と姉しかいませんでした。姉は、受験勉強をしている私のためにドーナツを作ってくれていたのです。ところが、台所から「ぎゃーっ！」という姉の悲鳴が聞こえました。私は、２階の自分の部屋から急いで１階の台所に駆けつけました。そこには、頭から熱い油をかぶってしまった姉の姿があったのです。何らかの事情で揚げていたドーナツが油の中で爆発してしまい、その油を姉は頭からかぶってしまったのです。鍋の中には、油は、ほとんど残っていませんでした。姉は、「救急車、呼んで！」と叫び、その床に倒れ込んでうなっているだけでした。

私は、すぐに受話器を上げてダイヤルを回しました。４０年も前ですので、携帯電話はありませんし、右の写真のようなダイヤルを回す電話機しかありませんでした。私は、この電話で「１、１、９」とダイヤルを回したはずだったのです。しかし、つながったのは「はい。１１０番です。事故ですか？事件ですか？」だったのです。きっと慌てていたので、指を「９」の所に入れないで「０」の所に入れてしまったのでしょう。「姉がやけどをしたので・・・。」とだけ、やっと言うと、「大丈夫です。こちらから救急車を手配します。」と言ってくださったのです。だから、私はこの時に１１９番へは通報していないのです。

すぐに救急車は、家に駆けつけてくれました。救急車が到着するまでの間、高温の油を頭からかぶった姉は、真冬というのに震えながら冷水を頭から浴びていました。実は、この後、すぐに消防署から電話がかかってきて、少し落ち着いた私が電話を取り、状況を説明すると、「とにかく救急車が到着するまで冷水で冷やしてください。」と教えてくださったのです。

姉は、しばらく入院し、やけどの跡が残るかもしれないという不安と戦いながら療養しました。おかげさまで、数か月後、やけどの跡は、化粧をすれば目立たなくなるまでに回復しました。それも、救急車が迅速に来てくれたことや、消防署の方が、救急車の到着まで冷水で冷やすことを指示してくださったおかげだと思います。

今日、３年生の勉強で、１１０番通報したら、どのように連絡がつながるのかという図に、「警察本部と消防署に双方向の矢印（⇔）があるけど、その理由は、何だろう？」と考えていたのでこのことを思い出しました。警察と消防はつながっている（連携している）ということを改めて実感させられました。それと同時に、４０年以上も前のことですが、昨日のことのように、その時の状況や気持ちを思い出しました。

ところで、ドーナツが油の中で爆発してしまった原因は、はっきりとは分からなかったのですが、４０年経った今、インターネットで検索してみると、ドーナツの爆破事故は、少なからずあるようです。皆様も気を付けてくださいね。

修学旅行の裏舞台

昨年度から、コロナ禍ということで様々な行事が中止となったり、制限のある中での開催となったりしております。小学校生活６年間の中でも、最も思い出に残る行事である「修学旅行」につきましても例外ではありません。昨年度は、２回に分けての日帰り旅行となりました。しかも、２回目を実施できたのは卒業式を目前にした３月でした。

昨年度、５年生の時に宿泊学習が実施できていない現在の６年生には、今年は、何とか例年通りの修学旅行をしてもらいたいと考えておりました。しかし、新型コロナウイルスの感染状況は、今年度になっても好転せず、京阪神への旅行は断念せざるを得なくなりました。多くの学校が、県内旅行や宿泊をしない日帰り旅行に転換する中で、私は何とか１泊２日で旅行することはできないものかと考えました。感染状況は落ち着いていたとしても、県外泊となって、もし体調に異変が出た場合、最悪の事態を想定すると、香川県に帰って来ることができなくなるおそれもあります。ましてや、旅行の実施時期に感染が拡大していたら県外に行くことすら困難になります。そこで、まず考えたのが、県内に１泊し、できれば県外の目的地を設定するということでした。感染状況によっては、県内泊の県内旅行、または、日帰りの県内旅行へ移すことができるようにとも考えたのです。

滋賀県のホテルをキャンセルした後、県内の宿泊施設を旅行会社に無理を言って探していただきました。そして、高松市のホテルを何とか予約することができたのです。部屋については、旅行実施日の感染状況が全く分からないため、（結果的には感染状況は最良の状態でしたが･･･）できるだけ少人数のツインを基本としました。食事については、本校単独の食事会場をお願いしました。こちらについては、当初は、朝食は他の一般客と一緒にということでしたが、ホテル側の配慮により夕食も朝食も本校だけの貸し切り会場となりました。

次に目的地です。高松泊を前提に、秋の遠足が県内となってしまいましたので、できれば近県へと考えたところ、岡山県、高知県、徳島県、愛媛県という選択肢が浮かんできました。いろいろと情報を集め、お見送りとお迎えの時間につきましても考慮し（出発は、保護者の皆様がお仕事に行かれる前に集合し、解散は、お仕事が終わってからお迎えをお願いできる夜）、比較的近距離の岡山県を１日目、２日目を琴平経由の高知県として計画したわけです。

私がしたことはここまでです。細かな計画は、旅行会社の担当者と６年生の担任が何度も何度も打ち合わせをしてこの修学旅行が実現できたのです。

右の写真は、修学旅行出発前の学校の様子です。帰った時の写真は撮っていないのですが、きっと同じ風景だったのでしょうね。